第７回ＢＥＬＣＡ賞表彰作品

第７回　BELCA賞　ロングライフ部門　審査評

伊予銀行本店

所　有　者　株式会社　伊予銀行
設　計　者　株式会社　日建設計
施　工　者　株式会社　竹中工務店
維持管理者　株式会社　伊予銀行
所　在　地　松山市南堀端町１番地
竣　　工　1952年９月30日

昭和20年我が国が初めて体験した敗戦と日本の国家、社会の崩壊、そして新たな再構築という大きな試練と混乱から立ち上り本格的な復興期に入った昭和27年にこの建築は誕生した。当時は復興期とはいえ経済最優先の時であり、建築の持つ価値観は社会的にいまだ希薄であり必要に応じるままに安易に建設され、現在その多くは取り壊され姿を消している。

戦後急激に押し寄せた近代建築の新たな波は、建築界の主流となりつつあった時代背景の中で建設され、市民に古くより親しまれた松山城の水と緑に溶け込むかのようにあえて古典的とも言える手法でデザインされた伊予銀行は、落ち着いたたたずまいを今も見せている。外壁の持つ量感、巧みに配置された開口部の持つリズム感と陰影、それらが一体となり純化されたマッスの持つ風格と力強さは、地域経済の安定と信頼の象徴を銀行の使命とする発注者の願いに建築が応えた姿であろう。戦後、建築資材の入手困難な時に本格的な建築の思考を基に外壁に採用された耐久性の高い擬石ブロック、その厚い壁に守られたスチールサッシュ、各所に用いられた人造石研出し、洗い出し等安定した素材の選択と確かなディテール、又戦前より鍛えられた職人の技による手作りの建築の素晴らしさが各所に見られこれらが長寿化を実現している。

又、最近実施された耐震診断では補強の要なしとの結論を得ているが、第一世代耐震基準による建築では稀であり、建築計画と一体としての構造計画の長寿化に対する重要性を示している。

設備面では当時特殊な建築について実用段階に入ったセントラル冷暖房、又省エネルギーを考え量産が開始されたばかりの蛍光灯を全館に採用し、未来オフィスの実現を目指した先進性も伺え、これを継承して2010年までを視野に入れた「将来維持保全計画」「総合管理、清掃作業基本計画」等の作成整備がされており、設備の劣朽化に対しても建築内外観を元設計を損なわないよう補修に対する配慮と苦心が各所に見受けられる。

建設当時を想わせる吹抜の営業室の賑わいと騒めきを眺めながら所有者は現在もこの建築の持つ物理、精神両機能共に満足しており、建て替える意志のないことを明言している。この様な建築を愛し、価値の高い公共財としての建築への認識を所有者、設計者、施工者の共有を得てこの建築は半世紀を迎え、さらにこれからも永くこの建築は生き続けることであろう。

以上総合的な評価と松山の街に定着し、風格をも加え存在感ももって地域の人々に親しまれるこの建築はBELCA賞の受賞に相応しいものと思われる。